

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 25 日現在

機関番号：34410

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2014

課題番号：24530221

研究課題名(和文) 近世日本の経済思想の諸相と西洋思想との接点

研究課題名(英文) A History of Economic Thought in modern Japan and its relation to Western Thought

研究代表者

森岡 邦泰 (morioka, kuniyasu)

大阪商業大学・経済学部・准教授

研究者番号：90268293

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)： 本多利明の開業思想を明らかにした。それは文明化作用に着目した撫育策であり、侵略であった支那のそれとは違い、西洋はこのような手段を用いたと主張した。

海保青陵のイデオロギー操作による富国策について研究を行った。低賃金経済論を持つイギリス重商主義と違い、青陵は為政者のイデオロギー操作によって、勤勉な労働主体を創出しようとしたことを明らかにした。

クリストファー・ベリー グラスゴー大学名誉教授を招聘して、イギリス商業社会論の知見を得るための研究会を開いた。ルソーとプーフENDORFについて、プーフENDORFの道徳的存在と物理的存在の概念がどのようにルソーに影響を与えたかを解明した。

研究成果の概要(英文)： I studied Honda Toshiaki's ideas about colonization. A word "colonization" was originally a translation equivalent from Dutch. Toshiaki's idea was based on the understanding of the power of civilization. A more savage people are voluntarily willing to accept more advanced utensils and ideas and to assimilate themselves into more civilized society. In his main work he says that Westerner colonized savage land by civilizing indigenous people while Chinese invaded and got its territory and often caused a war. His idea is interesting and peculiar, compared with contemporary ones in Japan and western idea about colonization based on Christianity. I gave several workshops inviting Professor Christopher Berry(University of Glasgow). I wrote a joint work called "Virtues, Commerce and Civil Society".

研究分野：社会思想史

キーワード：経済思想 社会思想

1. 研究開始当初の背景

江戸後期の経済思想の研究を、本多利明と海保青陵を中心に行うことを試みた。その背景には、江戸時代の経済思想は、農本主義的自然経済観、貴穀賤金、尚農卑商論、棄利愛民の色彩が強く、それは荻生徂徠の武士土着論から、幕末の横井小楠まで、多かれ少なかれ流れていたが、その中にあって、江戸後期に現れた本多利明と海保青陵は、それとはまったく異質な、独特な経済思想を展開したことがある。

このように異質な思想を形成し得た両者の思想の特徴の解明が、求められるであろうとし、それに応えねばならないだろう。

2. 研究の目的

(1) 従来、本多利明と海保青陵は、日本における重商主義思想ととらえられてきた。海保青陵が藩単位の重商主義であるのに対し、本多利明は国家単位で重商主義を唱えたというわけである。そこには西洋の重商主義概念を日本にも適用できるかどうかという問題があるが、確かに、類似した思想を展開している。しかし両者の思想は、重商主義とラベルを貼って終わるものではない。農本主義的経済思想が根強かった江戸時代に、どうしてそれとはまったく異質な経済思想が生まれたのか、また両者の思想の特徴は、重商主義というだけでは終わらないさまざまな要素も含んでいる。

そこでそれらの要素を明らかにすることを第一の目的とする。

(2) その際、とりわけ留意しなければならないのが、西洋思想との関わりである。そもそも重商主義自体が西洋の概念なので、西洋の経済思想の研究が前提となる。現在の研究成果の吸収とともに、自らも西洋経済思想の研究を進める必要がある。

また利明は、マルサスの人口原理と似た理論を、奇しくもマルサスの『人口論』初版が出版されたのと同じ年に、記している。この人口原理には数理的な発想が根底にあるが、マルサスは大学時代数学を専攻していたし、利明はもともと和算家であった。利明は数値例を出して議論を進めることが多く、そうした利明の思考法の一部を解明したいと考える。

利明の思考に大きな影響を与えたと思われるのは、当時の洋学である。鎖国時代の日本にあって、西洋の知見の流入は限られていた。当時の蘭学者は、それを求めて、遠方まで広く文献を探し、またさまざまなつてを頼って、最新の西洋の情報を手に入れようとした。蘭学者と交友のあった利明も、人脈を最大限に生かして、西洋事情の知識の摂取に努めた。当時の識者の手に入る情報で、どれほど利明の言説を説明できるのか、を解明した

い。これはまだ誰も行ったことのない研究テーマである。そして西洋事情・西洋思想の知見が本多の経済思想に与えたインパクト、経世家として行った貢献などの評価を試みたい。

(3) 海保青陵については、近世の多くの経世家が倭約論を主張したのに対し、青陵の富国策は、倭約も説かれるがそれだけでなく、藩の赤字体質を改善するためには、自国の産物を外部に売って(産物マワシ)他国の金を吸い取ることを主張する藩単位の重商主義思想と解されてきた。

しかし本研究が着目するのは、経済主体の創出である。儒学的な棄利愛民思想からは、近代的な経済主体のイデオロギーは出てこない。儒学者で、藩儒でさえあった青陵が、儒学とはまったく異質な経済主体の観念をどのように生み出したのか、またその特徴は何かを明らかにする。

3. 研究の方法

(1) これまで日本の経済思想研究は、西洋の経済思想研究を理論的な参照枠としてしているので、その当否はともかく、本研究が対象とする時代の西洋の商業社会を参照しなければならない。そこでアダム・スミス、ヒュームなどのスコットランド啓蒙研究の泰斗、グラスゴー大学のクリストファー・ペリー名誉教授を招聘し、研究会を開催して、専門的知見の提供を受ける。

(2) 資料収集を行う。本多利明は、未だ全集が刊行されていない。そのため関連資料が、日本各地に散らばっているので、その収集に努める。また関連学会で知見の収集に努める。利明は西洋事情の紹介者でもあり、西洋からの影響も大きいので、関連する西洋思想、西洋史関係文献の収集に努める。

4. 研究成果

(1) 本多利明の開業思想について研究を行った。植民という言葉はオランダ語からの翻訳語であり、このことは当時の日本にはそのような思想はなかったことを示している。利明はそれを開業としてとらえた。つまり植民というよりは、荒蕪地、未開拓地の開発なのである。利明が想定していたのは、主に北方で、北海道、カムチャッカ半島などである。

利明の開業思想の際だった特徴は、それを文明化作用ととらえていたことである。スミスの『国富論』にも、文明社会論があり、当時のイギリスを文明化した商業社会ととらえていた。すでにアメリカ植民地を持っていたイギリスと違い、これから開発を進めることを目指した利明は、文明の恩恵がもたらす利益が自ずと均質な文明社会へと統合していくとみていて、その効果に期待した。未開

拓地にいるかもしれない原住民には、よりよい生活をもたらす文明の利器を提供することによって、原住民が自発的に同化していくというのである。エリアスのような文明化作用に着目している点が、江戸時代の他の経世家と比較して、利明の特徴の一つである。その思想はまた、キリスト教的使命感に基づいた同時代のヨーロッパの植民地思想とも異なるものである。

さらに利明は、西洋がこうした文明化作用に基づく撫育策で領土を拡大してきたが、それに対して支那は武力による侵略によったとする。そのため原住民は、武力に対しては、同種の手段、つまり武力で応答するので、戦争を引き起こしてきたとする。こうしたホップズを想起させる議論で、西洋と支那を対比的にとらえている。この西洋の理想化は、従来、その根拠が明らかにされることはなかった。本研究は次のようにその一端を明らかにした。

(2) 鎖国時代の海外情報の入手は、容易ではなかった。当時、西洋に関して識者ならば知り得た情報を順次検討してみた。

『華夷通商考』(1708年)について。これは、西川如見(1648-1724)が著した、日本で出版された最初の世界商業地理書である。同書は、オランダを「四季寒國」という。ドイツ、フランスも同様に、寒國であり、ロシアに至っては、「大寒國」という。ポイントは、このような寒冷地の国が世界の強国になっているという点である。

『采覧異言』(1725年加筆完成)、『増訂 采覧異言』(1802年)について。新井白石が密入国した宣教師を取り調べて西洋の事情を記した『采覧異言』は、未公刊ながら、筆写を経て、日本中に広まっていた。他に西洋事情を記しためぼしい本がなかったからである。それを、輸入された蘭書と和漢の関連文献を広く渉猟して、訂正し、新たに蘭書からの翻訳を付け加えて書かれたのが『訂正増訂 采覧異言』である。これを著した山村才助は日本最初の西洋史研究者といわれる。才助と利明は友人関係にあり、才助が『訂正増訂 采覧異言』を書くために何年もかけて蓄えていたノートの情報は、利明も共有していたとみてよい。さて『采覧異言』によると、オランダはドイツから来た人々が開拓して作った国で、後にスペインの傘下に入ったが、戦争で独立したと書かれている。

ここで着目したいのは、利明の四大急務(焔硝、諸金、船舶、属島開業)の一つ、属島開業において、オランダ建国逸話がその根拠になっていることである。利明の「西域物語」によると、オランダは、ウィリアム1世が神聖ローマ帝国カール5世に許しを得て、寒冷な荒地であったアムステルダム周辺を開拓しに出かけ、町を築いて作った国である。この話はもちろん間違っているのであるが、利明は、だからカムチャッカを開発でき

ると主張するのである。当時、利明がカムチャッカ開業を説いても、世人は、蝦夷地の奥では極めて寒冷で、耳を貸さなかったと述べている。しかしオランダも同様な寒冷地であったが今や世界の強国の一つであり、アムステルダムは、三大都市の一つになったという。カムチャッカ開業をオランダ建国と同一視していることが、利明の北方開発論の大きな根拠となっているので、重要なのである。

では、この逸話を利明はどこから仕入れてきたのか。従来はこの記述が虚構を含んでいるといわれているだけだった。それなら利明はまったく自分の想像力だけで、この逸話を小説のように作ったのか。そうではあるまい。それなりの典拠があったはずである。従来の研究では、その点に注目することはまったくなかった。

さて『采覧異言』は、オランダ建国について、利明のオランダ建国逸話と同じパターンを見せている。むしろ『采覧異言』のオランダ建国の記述は、時代が明記されていないが、おそらく古代のことをいっていると思われる。しかし『采覧異言』の叙述を読む限り、年代の記載がなく、建国からすぐスペインとの戦争の話になるので、ほぼ同時代だと錯覚しても無理もない。実はこの種のパターンが他の文献にも見られるのである。

『訂正増訂 采覧異言』のほうは、蘭書からの翻訳を多用しているので、総じて記述は正確である。しかし、オランダ建国について、ドイツ人がローマ国と盟約を結んで、北海の地に向かい、戦争の末、原住民を追い出し、土木工事を行って数十里の原野を切り開いてヨーロッパに新たに一国を建てたと書いてある。これも上と同じ図式の建国逸話である。このローマとは古代ローマのことだと思われるが、後に神聖ローマ帝国のほうのローマも出てきて、この両者は才助においては区別されているものの、読んでいてわかりにくいところもあるので、利明がこの情報に何らかの形で接したことがあるとすれば、両者を混同した可能性は高い。

なお朽木昌綱の『泰西輿地図説』(1789年)は、蘭書の翻訳に基づいていて、学術的にも正確な書物だが、オランダの物産について、州によっては、穀物野菜などを豊富に産すると書いてあるので、これも利明のカムチャッカ開業論を補強する情報となる。

さらに『采覧異言』には、小国で財貨も乏しかったオランダが、海外交易と植民地獲得で大国となったという話が載っており、これをオランダモデルと呼べば、利明の四大急務の「諸金」と「船舶」と「属島の開業」の根拠となっているものである。「船舶」、つまり船舶を建造し航海技術を身につけ、外国交易をする、それによって金銀を蓄え、国を富ますことができる(「諸金」)。さらに海外に進出することによって、属島を開業できる。これが利明の国家豊饒策の重要な部分であるが、その根拠となったオランダモデルは、す

で『采覧異言』で、原型が与えられているといえよう。

オランダモデルの他に、さらに国家豊饒策のひとつとして、ロシアモデルと呼ぶべきものを考えよう。国土開発のために火薬を積極的に利用することを、利明は四大急務のひとつ「焰硝」で説いているが、その模範となっているのが、ロシアである。ロシアが広大な国土を、火薬でもって切り開き開発し、それによって治水を行い、交通も整備した、と見ている。ロシアの事績で利明が特にほめたたえるのが、エカテリーナの治政である。エカテリーナの大徳のゆえに、焰硝も英物も国家のために用いられたという。有能な人材の登用、寒冷とはいえ火薬を用いた広大な国土開発、治水と交通の整備、徳を広めることによる属島の開業、つまり文明化作用による領土拡大、これらをエカテリーナの治政に見ている。これをロシアモデルと呼ぼう。利明のカムチャッカ開発は、このロシアモデルとオランダ建国史が根拠となっている。

エカテリーナの即位は1762年だが、利明著作で言及している洋書の多くがそれより刊行年が古い。西洋の事情を記した漢籍はさらに古い。従って即位以降で当時の識者が知りうる情報を探ってみることにすると、『ペシケレイヒング・ハン・ルユスランド』と当時蘭学者に呼ばれ、重宝された書物がある。レイツ(J. F. Reitz)他が著した蘭書『新旧ロシア帝国誌』である。これは前野良沢によって、一部が翻訳されており、その写本には利明の書き込みも見られる。良沢は1744年刊行の版を用いている。しかし1744年以降の皇帝の記述もあるので、良沢は、他の本を参照したと思われるが、本研究では、それは「ゼオガラヒー」と当時蘭学者に珍重された地理書であることが濃厚であるとみている。なぜなら工藤平助が『赤蝦夷風説考』で、やはり『ペシケレイヒング・ハン・ルユスランド』によりながら、その本が記述するより後年の事柄は、ゼオガラヒーによって書き継ぐと明記しており、良沢も同様に第一選択として同書によったであろうことは、まず疑い得ないからである。

当時、漂流者からロシアに関する貴重な情報もたらされていた。大黒屋光太夫である。桂川甫周が聞き取りして、蘭書のロシア地理の記述と照らし合わせて、ロシアの事情を『北槎聞略』にまとめた。この情報は、非常に詳細で、しかも生き生きとしている。この情報は公開されなかったが、識者の間では、流通していたとみられている。

さて『北槎聞略』では、カムチャッカは非常に寒冷な土地として描かれている。利明はあくまで緯度による気候決定に固執していたようである。

エカテリーナの死去を伝えたのは、オランダ風説書である。利明の1798年成立の「西域物語」にも1796年死去の情報が載ってい

るので、利明はいち早くこの情報をつかんでいたようである。

ところでロシアのシベリア経営について、現代の歴史家が描くところによると、好戦的なチュクチ族にロシアは手を焼いていたが、やがてチュクチ族の方から、交易を求めようになったという。彼らは鉄器や火器を求めていた。これは図らずも、利明のいう文明化作用による撫育策と結果的に同じものとなったのである。

(3) 海保青陵のイデオロギー操作による富国策について。

民衆をいかに働かせるか。イギリス重商主義では自発的失業状態(怠惰)を就業へ駆る最も有力な刺激として低賃金の経済があったとされるが、青陵の場合は、イデオロギー操作で、儉約を旨とする勤勉な経済主体を創出する。この点が、青陵が他の経世家と異なる際だった特徴であり、また本研究が明らかにしたものである。

西洋の重商主義経済思想の低賃金経済のように、低賃金により、いわば鞭を振るって怠惰な民衆を働かせるのではなく、諸個人を自発的に労働へと赴かせる、つまり自ら勤勉になるような行動をさせるのが、青陵の主張であり、民衆にそのようなイデオロギーを浸透させることを主張するのである。民衆は習慣に左右されるものであるから、民衆の生活態度は為政者の操り次第だという。人間は癖のつきようでどのようにもなる。だから癖をつけさせることによって、民を操ることほどおもしろいものはないという。奢侈にふける民衆を儉約主体の民衆へイデオロギー操作によって作りかえ、勤勉な経済主体を創出することを主張するのである。

これは世界中のイデオロギーの歴史においても特筆すべき主張であり、また同時代のイギリスの経済思想と比較しても、低賃金などに依存しない点で、卓越した理論を持っているといえよう。

(4) 参照枠となるイギリスの商業社会論の知見を得るため、この分野の泰斗、クリストファー・ベリー グラスゴー大学名誉教授を招聘して、次の日程で研究会を開いた。なお、この研究会は経済学史学会、社会思想史学会そのほかの学会の会員に広く参加を呼びかけた。

2014年2月27日 京都大学
演題 The Idea of "Civil Society" in the Scottish Enlightenment.

2014年3月1日 関西学院大学
演題 Adam Smith: Freedom, Modernity and the Virtues and Commerce.

2014年3月4日 岡山大学
演題 Adam Smith on Liberty and

Modernity.

2014年3月6日 大阪商業大学
演題 Hume on Commerce, Society and Ethics.

2014年3月8日 東洋大学
演題 Hume on Commerce, Society and Ethics.

2014年3月12日 立教大学
演題 Civil Society and the Scottish Enlightenment.

(5)18世紀啓蒙思想研究。同時代の日本と西洋の比較研究のため、共著『徳・商業・文明社会』(京都大学学術出版会、2015年)を著した。

そこでは、「ルソーとプーフェンドルフ」と題して、プーフェンドルフの道徳的存在と物理的存在の概念が、どのようにルソーの基礎概念に影響を与え、またそれを形成しているかを明らかにした。また百科全書に対する影響も考察した。

道徳論は、アダム・スミスが道徳哲学の担当教授だったように、経済思想の揺籃となるものであり、重要である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

森岡邦泰、日本の開業思想 本多利明を中心に、大阪商業大学論集、査読無、175号、2015、pp.31 - 47。

森岡邦泰、本田利明の著作における海外情報、大阪商業大学論集、査読無、177号、2015、pp.35 - 48。

〔学会発表〕(計 2 件)

森岡邦泰、日本の開業思想 本多利明を中心に、第39回社会思想史学会、2014年10月26日、明治大学(東京都)。

森岡邦泰、近世における経済主体の創出と富国策、経済学史学会関西西部会第167回例会、2014年11月22日、龍谷大学(京都府・京都市)。

〔図書〕(計 1 件)

坂本達哉、長尾伸一、J・G・A・ポーコック、伊藤誠一郎、林直樹、生越利昭、門亜樹子、米田昇平、犬塚元、篠原久、渡辺恵一、野原慎司、森岡邦泰、中澤信彦、川名雄一郎、小田川大典、太子堂正称、村井明彦、穂刈亨、田中秀夫、京都大学学術出版会、徳・商業・文明社会、2015年、412(243 - 260)ページ。

ジ。

〔産業財産権〕
出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

森岡 邦泰 (MORIOKA, Kuniyasu)
大阪商業大学・経済学部・准教授
研究者番号：90268293

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：